

チベット所伝のパーリ經典

—北京. No. 752, 754, 756, 759 について—

山 口 務

I. チベット大藏經にはパーリ經典からの翻訳とされる 13 經が含まれているが、その内、4 經を取上げる。4 經の中で No. 752 の前半部分には『増一阿含經』卷第 47 (大正 2. 806a~b) が、No. 759 には『法句經』吉祥品 (大正 4. 574c~575b) と『法句譬喻經』吉祥品 (大正 4. 608c~609b) が各々対応するが、チベット訳はほとんどパーリ文に一致すること、また奥書 (北京. Vol. 21, p. 306-5-5~p. 307-1-2) に、セイロン出身の Paṇḍita Ānandaśrī の面前で翻訳したとあることから、これらはパーリ經典であると思われる。

しかし、現行の諸版パーリ經典との間には相違箇所が認められる。その箇所については仏訳者 Feer¹⁾ が若干註記しているが、仏訳にはチベット訳をパーリ文に合わせて訳した箇所もあり、十分なものではない。それで、ここでは、チベット訳と現行パーリ經典との主な相違箇所を挙げ、チベット訳の原典について考えてみたい。

II. No. 752 Maitrībhāvanā-sūtra²⁾、本經は Feer によれば AN. V, p. 342 の散文と Jātaka VI, p. 14 の韻文より成っている³⁾と言われる。

[A] *dus rtag tu sems śin tu dgaḥ bar gnas pa daṅ* / (300-5-1) 常時、心は喜びに住する。

[A'] *tuvatam cittam samādhīyati*, (342. 9) 速かに、心が統一される。

[B] *ches cer bag yod par byed⁴⁾ pas tsaṅs paḥi ḥjig rten du skye baḥo* // (300-5-1~2) より不放逸に為すことによって梵天に生まれる。

[B'] *uttarim appaṭivijjhanto brahmalokūpago hoti*. (342. 10~11) 上位に通達しなければ梵天に生まれる。

[B] の~~~~線部は [B'] の~~~~線部に対応するが意味は異なる。

『増一阿含經』には、長行では「若身壞命終生_二 梵天上_一。」とあるが偈文では「以_三 能行_二 此慈_一 當_レ 生_二 梵天上_一。」(806a) とあり、チベット訳に近い。なお [A] [B], [A'] [B'] は Tib., Pāli. において慈修習の 11 の功德の中に数えら

れている。

No. 754 Giri-Ānada-sūtra, 本經は Girimānandasutta (AN. V, pp. 108~112) に対応する。

[A] lus ḥdi la skra dañ.....gcin dañ klad⁵⁾ pa ste mi gtsaṇ baḥi rdzas sum bcu rtsa gñis so // (303-4-5~8) この身には髪……尿そして腦の、不淨の 32 のものがある。

[A'] atthi imasmiṃ kāye kesā.....muttan (109. 21~26) この身には髪……尿がある。

[A] の~~~線部は [A'] にはない。現行のパーリ文献における身体の区分には 31 と 32 の両方があるが、それは腦を含めるか否かによる。Girimānadasutta では 31 身分であるのに対し、チベット訳は 32 身分を説いている。

入出息念の箇所は「空屋に行き結跏趺坐して……」という準備段階が一致する他はほとんど異なる。その中、特に異なる箇所を挙げてみよう。

[B] sems shi gnas la gnas pas dbugs thuṇ du rgyus na rgyus so sñam du bslab par byaḥo // sems shi gnas la gnas pas lhag mthoṇ du gnas par bslab par byaḥo // (304-2-7) 心が止に住することによって (=住して?) 短かく入息した時、入息したと学ぶべきである。心が止に住することによって (=住して?) 観に住することを学ぶべきである。

[B'] 'samādahaṃ cittam (assasissāmi'ti sikkhati, 'samādahaṃ cittam passasissāmi'ti sikkhati.) (112. 2~3) 心を統一して (私は入息すると学び、心を統一して私は出息すると学ぶ)。

チベット訳パーリ文共に、この後、下線部が「心解脱」乃至「捨離を見ること」に変わる以外は同じであるが、チベット訳にはパーリ文にない観 (lhag mthoṇ) が常に説かれる。

No. 756 Mahākāśyapa-sūtra, 本經は Gilāna 1 (SN. V, pp. 79~80) に対応する。

[A] Ḥod sroṇ khyod ji ltar bzaḥ ba ḥdod dam / ji ltar sdug bñal myoṇ ji ltar shi bar ḥgyur / shi bar byed paḥi thabs kyis mi shi ba ma yin no // (305-4-3~4) カーシュヤパよ、あなたは食物を欲するか。苦を感受しているか。(それとも) 鎮まっているか。鎮める方法によって鎮まらないことはない。

[A'] Kacci te Kassapa khamaniyaṃ kacci yāpaniyaṃ kacci dukkhā vedanā paṭikkamanti no abhikkamanti paṭikkamo'sānaṃ paññāyati no abhikkamo (79, 28~30) カッサパよ、あなたは耐えられるか。活力があるか。苦の感受は減退し、増進しないか。減退がついに認められ、増進はないか。

パーリ文には~~~~線部に対応するものがないが、チベット訳にはカーシュヤパの返答においても「どうぞ鎮める方法(の教示?)をなさってくださいますように (shi bar byed paḥi thabs mdzad du gsol)。」(305-4-4~5) とある。そして返答の後に、Tib., Pāli 共に世尊によって七覚支が説かれ病が治る。

『増一阿含經』卷第33には[A]の対応箇所があるが、その最後に「又⁶⁾能堪任受_レ 吾教_レ 耶⁶⁾」(大正. 2. 731 a)とありその返答の最後にも「所_レ 服藥草靡_レ 不_レ 周遍_レ」とあるので、苦を鎮める方法について語られている点はチベット訳と同じである。

No. 759 Mahāmaṅgala-sūtra, 本經は Mahāmaṅgalasutta (Sn. pp. 46~47), Maṅgalasutta (Khuddakapāṭha pp. 2~3) に対応するが、パーリ文は両方同内容である。

[A] lhaḥi yaṇ lha yis bkaḥ stsal ba / / sdig pa thams cad rnam par ḥjoms / / ḥjig rten kun la phan paḥi don⁷⁾ / / bkra śis de rnams khyed la bśad / (306-3-8~4-1) 天中天が仰云った。あらゆる惡に打勝ち、一切世間に利益のあるもの、その諸の吉祥を汝等に説く。

この韻文は神々が世尊に最上の吉祥の説示を請うた後にあるが、パーリ文はこれを欠き直接吉祥の説示が始まる。

ところで、ビルマのバリッタ集の中の吉祥經の本文もこの箇所を欠くが、本文の前にはNidāna (序偈) 2偈がある⁸⁾。その中、第2偈は[A]に対応する。一方、第1偈の対応箇所が經の本文にあることから第2偈の対応箇所[A]も本来、パーリの本文中にあったとも考えられる。

『法句經』(575a), 『法句譬喻經』(609a) にも、吉祥の問いの後に「於是仏慰傷為説真有要」とあり、直接吉祥の説示が始められない点はチベット訳と同じである。

[B] tshig ṇan pa ni bzod par bya / (306-4-6) 惡言を忍ぶべきである。

[B'] Khantī ca sovacassatā (9偈 a) 忍と善語。

パーリ文では単に忍とだけあるが『法句經』(575a) には「所聞常 (= 当 ⊕) 以忍」, 『法句譬喻經』(609a) にも「所聞常欲 (= 多以 ⊕) 忍」とあり忍の対象が示されていることはチベット訳と同じである。

III. 以上が主な相違であるが原典に忠実なチベット訳の性質及び漢訳の対応箇所から見て、これらの相違は翻訳の際にできたものではなくチベット訳の原典が現行のパーリ經典と異なっていたことによるものと思われる。

現行のパーリ經典は大寺派のものであるが、保守派であるから經典の内容の変

化はほとんど考えられない。事実、No. 752 [A'] [B'] はその註 *Manoratha-pūraṇī* (V, P. 83) に、No. 754 [B'] は *Visuddhimagga* (P. 267) に、そして No. 759 [B'] はその註 *Paramattha-jotikā* (P. 148) に引用されているものと一致する。これらの註釈文献等は5～6世紀のものであるので5～6世紀から現在まで変わっていないことが分かる。

ところで、4經の翻訳は奥書に見える *Ñi ma rgyal mtshan dpal bzañ po* が Bu ston の師であることから14世紀の初め⁹⁾とされるが、当時のセイロンを考えると、正統説の大寺派、異説を唱えた無畏山寺派とジェータ林寺派に分かれて長い間対立していたセイロン上座部は12世紀に大寺派の戒律に基く国法によって大寺派に統一されたと言われる。しかし、*Cūḷavaṃsa* (LXXVIII, 26) に、大寺派以外の者すべてを還俗させたのではなく、「破戒の者を還俗させ多くの行者を沙弥にした」とあるから、12世紀以後、他の派が全く存在していなかったとは言えないであろう。

このように考えるならば、ここで取上げた4つのチベット訳の原典は無畏山寺派或はジェータ林寺派に属する可能性が出てくるのではないかと思われるのである。

1) L. Feer, *Fragments Extraits du Kandjour*, Annales du Musée Guimet, tome cinquième, Paris, 1883. 2) Tib. はすべての經名を Skt. 語で示している。音訳語も Skt. 語であるが、どこで Skt. 語に変わったかは不明。 3) Feer, *op. cit.*, p. 221. 4) D. byas (No. 36 Ka 270a6). 5) D. glad (No. 38 Ka 277a3). 6) 文脈より宋元明三版の字「又」と「耶」を取る。 7) P. mdo (306-4-1), D. don (No. 43 Ka 283b2). 文脈より D. を取る。 8) 池田正隆「ビルマの護呪經典序偈——パリッタパーリ・ニダーナとその試訳——」(『大谷中・高等学校研究紀要』No. 10, p. 2) 参照。 9) 藤田宏達「仏伝資料の一考察——『ニダーナカタ』覚え書——」(『仏教の歴史的展開に見る諸形態 古田紹欽博士古稀記念論集』1981, p. 189)。

(北海道大学大学院修了)